

研究助成 2020年度 報告書

公益財団法人 黒潮生物研究所
理事長 深田 純子 殿

作成日のみ記入して下さい

作成日 令和 4年 3月31日
受領日 令和 4年 4月19日

貴財団の研究助成により、下記の成果を上げましたので報告いたします

助成者対象者氏名	樽本厚子
----------	------

学生の方はこちらに記入してください

学校名	九州大学大学院	学部 学科 講座 等	システム生命科学府 システム生命科学科
学 年	2年	区 分	修士
指導教官 氏 名	新垣誠司	指導教官の所属・職	九州大学理学研究院生物科学部門海洋生物学・准教授

一般の研究者の方はこちらに記入してください

所属		職名	
最終学歴		学位等	

研究課題名	地方名のバリエーションから紐解く温暖化の影響：黒潮流域における海洋生物の分布域変遷
-------	---

助成を受けた研究内容について、学会等での発表、学術誌等への公表を行った場合には、下欄にその内容（講演の場合：学会名、期日、タイトル、発表者名等、著作の場合：著者、発行年月、タイトル、雑誌名等）を記入して下さい

研究の内容(研究成果)報告書の作成要領

- ・別途研究成果をA4の用紙1枚にまとめて下さい。
- ・言語は日本語とします
- ・1行目に研究課題名、2行目に研究の実施者名(助成対象者名に○印をつける)を記入してください
- ・本文は図表、テキスト等、自由にレイアウトして結構です
- ・報告書は、Word、Excel、PowerPoint
Adobe-Photoshop、Adobe-Illustratorなどで表示可能なファイル形式で作成してください
- ・標準フォント以外のフォントは埋め込んで下さい
- ・成果報告書は当財団のホームページ等に公表しますので、著作権やデータの取り扱い等には十分ご注意ください
- ・報告書(この紙と成果報告書の2枚)は、メールにて助成金担当の戸篠(toshino@kuroshio.or.jp)までお送り下さい
- ・提出期限は2022年4月末日とする

地方名のバリエーションから紐解く温暖化の影響：黒潮流域における海洋生物の分布域変遷

樽本厚子 新垣誠司 Reimer James Davis 小枝圭太 櫛田優花 水上伊織

本研究では、沿岸海洋生物の地方名のバリエーションを基に環境変動に伴う分布域変遷を評価することを目的とし、漁業関係者にアンケート調査を行って調査対象種の呼び名と近年の漁獲量に関するデータを集めた（図1：アンケート内容例）。調査対象種は、アカハタ (*Epinephelus fasciatus*)、オオモンハタ (*Epinephelus areolatus*)、カンモンハタ (*Epinephelus merra*)、キジハタ (*Epinephelus akaara*)、スジアラ (*Plectropomus leopardus*)、カサゴ (*Sebastiscus marmoratus*)、ハマフエフキ (*Lethrinus nebulosus*)、カンパチ (*Seriola dumerili*)、ヒレナガカンパチ (*Seriola rivoliana*)、ニセタカサゴ (*Plerocaesio marri*)、タカベ (*Labracoglossa argentiventris*)、アイゴ (*Siganus fuscescens*)、ブダイ (*Calotomus japonicus*)、ナンヨウブダイ (*Chlorurus microrhinos*)、ヒブダイ (*Scarus ghobban*)、アオブダイ (*Scarus ovifrons*)、カワハギ (*Stephanolepis cirrhifer*)、テングハギ (*Naso unicornis*)、ウスバハギ (*Aluterus monoceros*)、ソウシハギ (*Aluterus scriptus*)、ホウライヒメジ (*Parupeneus ciliatus*)、オジサン (*Parupeneus multifasciatus*)、コロダイ (*Diagramma pictum*)、マガキガイ (*Strombus luhuanus*) の24種とした。併せて、回答者の操業海域、漁法、勤務年数に関する情報も収集した。黒潮流域を中心に、沖縄県から福島県までの太平洋および日本海に面する24県を調査対象地域とし、それらの地域にある漁業協同組合117施設、414名より回答を得た（図2：回答のあった漁業協同組合）。

各種の回答数は、カサゴ、カンパチ、アイゴ、カワハギ、ウスバハギで特に多く、それらが広く分布していることが推察された。その内、アイゴ、カワハギ、ウスバハギには特に多様な呼び名が見られ、古くから広い範囲で漁獲され、それぞれの地域の呼び名が定着しているのではないかと予想された。近年の漁獲量については、ほとんどの種が高い割合で“減った”と回答されたが、アカハタ、オオモンハタ、キジハタのハタ類およびアイゴでは比較的多く“増えた”と回答された。特にアイゴは、日本海の高緯度地域において昔はいなかったが近年見られるようになったというコメントが複数あった。

標準和名と地方名を比べる際、地点間の距離も考慮に入れるため、過去の文献を基に各種の標準和名の起源となった場所を調べた。調査の結果、多くの魚種の標準和名は東京市場や神奈川県三崎での呼び名が基準となっていたが、一部は和歌山や小笠原での呼び名が基準になった可能性があることがわかった。

今後は、言語学的手法も検討しつつ、呼び名変遷の様子の数値化を目指す。そして、地理的特徴や各種の生物学的特徴を加味した上で、呼び名の変遷の様子と環境変化との関係性を評価する。

1. あなたの所属（または被験者）漁業協同組合、ご職業、勤務年数を教えてください。
漁師の方は生年漁獲、総漁獲量も教えてください。

所属（産別）
漁業協同組合
- 漁師 10年未満・10-19年・20-29年・30-39年・40-49年・50年以上
- 専業主婦 専業主婦・専業主婦・専業主婦・その他()
- 専業主婦以外 ()
- 専業主婦以外 ()

2. 次の魚を認識しお名前を教えてください。
また、昔と比べて増えているか、減っているかを教えてください。

	呼び名: (わからない) 増えた ・ 減った 変わらない ・ いない
	呼び名: (わからない) 増えた ・ 減った 変わらない ・ いない
	呼び名: (わからない) 増えた ・ 減った 変わらない ・ いない

図 1



図 2